注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
僕とシンフォギアと指輪の魔法使い

【作者名】
Ｔ＆Ｙ―Ｔｉｇａ

【あらすじ】
バカテス、仮面ライダー、そしてシンフォギアのクロスオーバー作品。
この出会いは運命か？それとも宿命か？
指輪の魔法使い「吉井明久」とシンフォギア装者「風鳴　翼」
本来出会うはずがなかった２人が出会う時、物語が加速する。
そして、その先に待つのは希望か絶望か？

魔法の指輪　ウィザードリング

今を生きる魔法使いは、その輝きを両手に宿し

絶望を希望に変える

序章　プロローグ

ある世界ではかつて昔に魔法というものが存在していた。
それはかつて科学と並ぶ学問であった。しかし、
文明の発達によりいつしかその存在は忘れ去られようとしていた。

そしてある世界では人を飲み込み炭素に変えてしまう認定特異災害「ノイズ」
が発生し、人々は不安や恐怖に脅かされていた。

だが、そこに一人の魔法使いが現れた。
魔法使いは、自ら「ウィザード」と名乗り自らの魔法で人々の
不安や恐怖、そして絶望を希望に変えていった。
彼はそこでノイズに立ち向かうシンフォギアを纏う少女達と出会う。

この物語は魔法使いと少女達の長い戦いの物語である。

今回はそんな魔法使い「ウィザード」の誕生について語ろう。

ある世界

春・・・それは出会いと別れそして、旅立ちの季節
そんな桜が舞い落ちるある日
学校の制服を着た1人の少年が走っていた。
彼の名は「吉井明久」今年で高校二年生。
今彼は学校に遅刻してしまい走っているのだ。

明久「はぁっ！はぁっ！・・・まさか新学期早々遅刻するなんてついてないよ。今日はーー！」

明久は叫びながら走り続ける

今日は彼が通っている高校の新学期が始まる日だった。
この時彼の中で、これからも同じ日々が続いていくと思っていた。
学校に着いて、授業を受け、友達と話したり
昼飯も仲良しの友達と食べたり、学校が終わって放課後は
どこかに行こうとしたり・・・
そんな何時までも続いていく普通の日常を過ごしていく
彼はそう思っていた。

だが・・・そんな彼の日常はこの日を境に・・・

明久「そう言えば今日は" 日食" が起きるんだっけ昨日のテレビでも
そう言っていたな」

一変してしまう・・・

明久「こうなったら近道を通って行こう！」

明久はそこで普段の道から外れ近道をして学校へ行こうと考えていた。
そしてある程度進むと彼は何かとぶつかってしまい尻餅をついた。

明久「いったぁ～・・・済みません！怪・我・は・・・」

そこで明久が見たものは灰色の体をした怪物
下級ファントムの「グール」だったのだ。

「グゥウウウウ!!」

明久「わぁあああああ!!」

明久は突然のことで叫んでしまったがグールは明久に向かって槍を振り下ろす

明久「うわぁ！」

何とか間一髪でかわしたが怪物があたった外壁は無残に破壊されその光景を見た明久は目の前で起こった事が現実だと見せつけられる。

明久「逃げないと・・・」

明久は何とか逃げようとするが彼の目の前には異形の影が立っていた。

？「ははははは！逃がすかよ『ゲート』が！」

明久「ぐぅ！・・・」

怪物は明久の腹に向けて抉るように殴ると明久は気を失った。

怪物「良し！こいつも連れていくぞ、こいつも我々と同じ『ファントム』になるんだからな！ははははは！」

気を失った明久を怪物と多数のグールで囲むと怪物が明久を担ぎ何処かへと連れて行った。

明久「・・・ここは？どこ？」

明久が目を覚まし起き上がるとそこは何処かの海岸線の崖だった。
すると、そこには男女問わず色々な人々が集められていた。

明久（一体何がどうなってるんだ？）

明久がそう思っているといきなり周りが暗くなりそこにいる
全員が空を見るとどす黒く光っている月が太陽と重なろうとして
いた。
男「なんだあれは？」 女「一体何なの？」

明久「日食？」

皆が色々と言っていると・・・

女「あ・・あ・あ・・・・・・・イヤあああああああ!!」
誰か叫んでいるのを気づいてその方向を見てみるとそこにいた一
人が
いきなり体中にひびが出てきてそれが全身にまわると
まるで殻を破るかのように怪物が出てきた。
すると、また一人また一人とひびが色々なところから出てきて次々
と怪物が出てきた
「うわあああああああああ」「きゃあああああああああああああ
ああああ」
そこにいた人々は次々と怪物が出てくるのを見て恐怖し絶望して
いった。
すると、ついに明久にもひびが入りとてつもない恐怖と絶望が襲い
かかる。

明久「僕はこんな所で死ぬのか…僕は…僕は…」

明久はそう思い空を見上げる

明久「そんなの絶対に嫌だ！　まだなにもしていないのに死ぬのは絶対に嫌だ！
僕は・・・僕は・・・僕は・・・生きるんだ!!!」

明久はその一心で太陽に手を伸ばした。すると
明久の体から光が出てきてそれが全身を包み明久は気を失った。

それから、何時間たっただろうか
明久はまるで深い眠りから目覚めるように意識を取り戻した。

明久「僕は一体どの位気絶していたんだ？僕は生きているのか？」

明久はそう思っているといきなり背後から別の怪物が現れた。

怪物「ちっ失敗したのがいたのか。ここで殺しておくか。」

そう言うと怪物は明久に襲いかかった。
だが、とうの明久はいきなりのことで動くことが出来なかった。

明久（もう、駄目だ）

明久がそう思ったその刹那
突如、明久の目の前に魔方陣のようなものが現れ怪物を吹き飛ばした。

怪物「ぐわあああ!!」

怪物が吹き飛ばされた後明久は後ろを振り向くとそこには
白いコートを身に纏い顔に仮面を着けた男が立っていた。
すると、男は魔方陣からなにかをとりだし明久の目の前に投げた

？「よく『ファントム』を押さえつけたなお前は『魔法使い』になる資格を得た。」

男はそう言うと一夏の目の前にしゃがみこみ箱の中から赤い宝石の入った指輪を取り出した。

？「この力を使うのはお前の自由だお前の本当の思いを言え。」

男はいきなり明久にそう言った。明久は、最初は何を言っているのか

分からなかったが直ぐにその質問に答えた。

明久「僕はもうこんな悲劇を繰り返したくない！

あんな奴らのためにもうこれ以上、誰かが死んでいくのを見たくない!!

今の僕にあいつらから誰かを守れる力があるのなら・・・

僕は・・・戦う!!」

明久は声を奮いそう答えた。

そして、その目は彼の決意そのものだった。

男は明久がそう言うと取り出した指輪を明久の目の前に差し出した。

？「ならば、頼むこの指輪と君の力でファントムから人々を守ってくれ。

ファントムを倒せるのは魔法使いだけだ。

だがこの指輪だけでは奴等には対抗することは出来ない。

それにお前にはこれからある『異世界』に行かなければならないんだ。

さっきの儀式で生まれた怪物『ファントム』はその異世界へと渡っ

てしまった
もし、一度その異世界へ行ってしまえば
もう二度とこの世界には帰れなくなるかも知れないのだ。
それでもお前は行くのか？」

男の質問に明久は直ぐに返答した。

明久「さっきも言いましたよ。僕はあいつら、いや『ファントム』から
人々を守れるのがその魔法使いだけなら・・・僕は戦うって」

明久は男にそう答えると男は明久の決意を理解したのか
立ち上がったすると男はベルトの向きを変えると
指輪を変えてベルトの前にかざした。

「ゲート　ナウ！」

すると男の前に魔法陣で出来たゲートが現れた。

？「このゲートの先の世界には面影堂という店がある
まずその面影堂に行ってくれ君の力になってくれるはずだ。
因みにこのゲートは3日間まで開いている
旅立つ前に準備でもしておくんだぞ」

男は明久にそう言うと光に包まれそして光が収まると同時に消えていた。
残っていたのは、男がくれたベルトと指輪と箱だけだった。

明久は直ぐに学園へ向かい事情を学園長と学年主任の高橋先生
そして、鉄人・・・いや、西村先生と話し最初は信じられなかった
3人だったが明久が実際に目の前で変身して信じてもらい

学園長から退学の許可を貰った。

そして翌日、明久は自分の家で準備をして
ゲームやエロ本などを売って路銀を増やし、友達には暫く旅に出ると
メールを打った

途中で白い魔法使いから連絡を貰い、白い魔法使いの使い魔である
ホワイトガルーダに案内され、彼の家である" 少女" と出会い
彼女の話を聞き、一緒に行こうと明久は言ったら彼女も賛同し
２人でその異世界へと旅に出る事になった。

そして３日目

明久達は『あの場所』へ向かった。

明久「・・・」

明久はゲートの前まで歩くと一旦足を止め振り返った。
暫く離れる自分が生まれ育った街を遠くから見ていると
隣にいた少女が明久に声をかけた。

?「どうしたんだ明久?」

明久「!ううん、何でもないよ…行こう。」

?「明久…」

明久「またね、皆・・・いつかまた帰って来るから」

聞こえないように小声でそう言うと２人はゲートを潜るとゲート

も消えた。

ゲートの向こう側の世界へとたどり着いた2人は
途中で"何故か明久1人"になり
そして町を歩く通行人から話を聞き面影堂へと向かった。

その途中で明久はある店であるポスターを見ていた。

明久「ふぅ～ん。風鳴　翼・・・か」

？〈頑張ってるみたいだな…翼〉

面影堂に着くと店主の矢嶋に全てを話し新しい指輪を作って貰うよう頼んだ。
かくして、明久は指輪の魔法使い「仮面ライダーウィザード」になり
ファントムと戦うことを決意するのであった。

続く！

設定

キャラクター設定

「吉井明久　仮面ライダーウィザード」

本作の主人公。元の世界で、文月学園の新学期の日に
ファントムに連れ去られサバトの儀式に巻き込まれる
そして絶望に堕ちそうになるが" 生きたい" と希望を持ったため
自分のファントムを抑え込むことに成功し自分一人だけ生き残った。
白い魔法使いからウィザードライバーとウィザードリング
魔法石が入った箱をを受け取り異世界へ渡ったファントム達と
同じ悲劇を二度と繰り返させないと決意し、人々を守るために
自分も異世界へ旅立つ。

因みに戦う前に絶望に堕ちかかったゲートを
「約束する、僕が〇〇の最後の希望だ」と励まし、
仮面ライダーウィザードに変身して戦っている。
※（〇〇は相手によって変える）

シンフォギアの世界に来て数日後にファントムと戦っている最中に
ノイズが乱入してきたが十分に戦えるため難なく撃退に成功したが
その様子を" ある組織の司令" や" 防人" に目撃されている。

この物語での明久の家族は明久が幼い頃に事故で明久だけを
残して亡くなっており息を引き取る直前に両親と姉から
「明久は私達の希望だ」という言葉を残し、

その言葉は明久の心の支えとなっている。

性格は、原作に近いが、鈍感ではなく、自分の恋も解るが
ファントムとの戦いに巻き込みたくないためあえて避けている模様。
また、以外と冷静な所も見せるが、時折バカな所もある。
家事などのスキルは、原作よりも上がっており身体能力、回復能力は
普通の人間の数十倍になっている。

元の世界でバイトの為にバイク免許を習得しており
休日は、マシンウィンガーでツーリング等をしている。

幼い頃からドーナツが好物であり異世界にある
移動ドーナツショップ「はんぐり～」のドーナツを食べてからは
ほぼ毎日食べているため店の常連。
だが、お気に入りのプレーンシュガーしか注文しない
(他人に奢る場合は別)。

変身前もウィザーソードガンを用いる他、一般人の前でも躊躇いなく
魔法も行使し、自身がウィザードであることを隠すような素振りは無く、
むしろ「魔法使い」であることを公言している。

幹部ファントム「フェニックス」とは
初めて戦った時からの良いライバル関係でいつか決着をつけようと
約束している。

オリジナルウィザードリング

・イリュージョンウィザードリング
自分自身の分身体を複数生成する。

・リカバリーウィザードリング
自身の魔力と引き換えに自分や相手の様々な状態異常を回復する。

ビートクラッシュウィザードリング
「クラッシュウィザード」や「クラッシュエンド」を発動する。

「クラッシュウィザード」
右拳に発生した魔法陣からスタイルに応じたエレメントを纏い、
ロンダートによって威力を増幅して、パンチを叩き込む。

「クラッシュエンド」
アンダーワールドでビートクラッシュウィザードリングを使用して発動する技。
クラッシュフェーズ（ドラゴンの爪を模した形態）
に変形したウィンガーウィザードラゴンを右手に合体させ、
スタイルに応じたエレメント・巨大な自身の幻影を纏いながらパンチを叩き込む。

他にも思いついたら追加していきます。

第1話　出会い

ノイズ・・・

それはこの世界での人類共通の脅威とされる認定特異災害。
ノイズは、突如として現れ、人間のみを大群で襲い、
触れた者を自分もろとも炭素の塊にしてしまう。
人類は必至でノイズに対抗するが通常兵器では
太刀打ちできず、ノイズは次々と人間をを襲っていく。

だが、そんな人間たちにも" 切り札" があった。
それは、「シンフォギア」
ノイズに対抗できる唯一の兵器であり、
この世界での希望は、シンフォギアを
装着する「装者」という少女だった。

そこに一人の「魔法使い」の男が現れた。
男は、顔を仮面で覆い、バイクに跨り、
自身の力である魔法と指輪で起こす力で人々を救い
彼も人々の希望の存在へとなっていった。

そんな彼を人は、こう呼んだ。

指輪の魔法使い

またの名を・・・

「仮面ライダー」と

ある商店街の道で二人の少女が話をしていた。

???「ねぇ、知ってる？未来」

???「何？響」

響「何って、『仮面ライダー』だよ」

未来「仮面ライダー？あぁ今、巷で噂になってる
仮面を被ってバイクに乗って、戦う。謎の人だよね」

そう今、この町では『仮面ライダー』の噂で持ちきりなのだ。

響「そうだよ！
なんでもね、この記事だと
少し前にまた変な怪物が暴れて
人を襲ってたんだけどそこに仮面ライダーが助けに現れて
怪物をやっつけちゃったんだって・・・
それで助けられた人が質問したんだけど
その人、自分は『魔法使いだ』って
言ったらバイクに乗って何処かへ行っちゃったんだって・・・」

響は携帯で謎の人『仮面ライダー』の情報を
親友の未来に教えた。

未来「ふぅん・・・でも、一体誰なんだろう？
仮面ライダーの正体って？」

響「うん、それが謎なんだよね。」

二人は一緒に空を見上げた。

いつか、自分達も会うか分からない
そんな雲の様な存在を・・・

そして、そんな雲の様な存在の
『仮面ライダー』＝明久は、と言うと・・・

ｓｉｄｅ　明久

明久「旨～♪さすが『ハングリー』のドーナツ♪
やっぱりプレーンシュガーは最高だね♪」

呑気にドーナツを食べていた。（街灯の上で）

すると首に掛けているペンダント
（ウィザードリングを紐で掛けた）から
声が聞こえてきた。

〈相変わらず旨そうに食うよな、明久。
あたしも食いてぇな〉

明久「こればかりは仕方ないよ。今の君は
このままの姿じゃなきゃいけないんだから。
それにちゃんと買ってあるから面影堂まで辛抱してね」

〈へーい〉

そこへ赤い色のした一匹の鳥が飛んできた。

ガルーダ「キュイ、キュイ。キュイ、キュイ。」

明久「見つけたんだね！ガルーダ！」

明久はガルーダが何を鳴いていたのかを
直ぐに理解した。

明久「はぁ～あ、まだ残ってるのに・・・
仕方ない、これはお預けだね」

〈しょうがないだろ？『奴等』が出てくるかも
知れないんだからさ〉

明久「まぁ、そうなんだけどね～
ま、しょうがないか！」

すると明久は右手の手形の形をしたベルトに
手をかざした。

「コネクト　プリーズ！」

コネクトリングで出てきた魔方陣に明久は手を伸ばした。
すると、魔方陣からバイクが出てきた。
明久専用のバイク「マシンウィンガー」である。

ちなみに、明久は今赤いシャツに
ジーパンそして黒いジャケットを着ていた。

明久は直ぐにそこから降りてマシンウィンガーに
乗り移りヘルメットを着ける。

明久「道案内宜しくね、ガルーダ！」

そして明久はガルーダの後を追ってバイクで移動した。

〈跳ばせーー♪　明久ーー！〉

明久「分かってるよー！」

「・・・奏」

～ある廃工場～

ｓｉｄｅ　???

そこに青い髪をした一人の少女が立っていた。

???「・・・」

少女はそこで目を瞑っていた。
まるで何かを待っているかの様に

???「・・・」

すると少女の耳に着けている小さなインカムから声がした。

???「そろそろ、来るぞ・・・『翼』」

翼「はい」

少女が返事をするとスライムの様な物体が進んできた。
それを見た少女はそっと" ある詠" を口ずさんだ。

『Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ』

すると少女の体が輝きだし、薄い防護服と最小限の鎧
を纏い、そして刀を持っていた。

ｓｏｎｇ『絶刀・天羽々斬』

「♪」

翼は歌いながらノイズを次々とアームドギアである
『天羽々斬』で切り裂いていった。

「♪」

〈逆羅刹〉

翼は逆立ちすると同時に脚に装備されたブレードで
横回転しながら、展開したブレードで周囲を切り裂いていく。

そしてあらかたノイズが片づくと翼は一旦距離を取る。

翼「これで止め！」

「♪」

歌も終盤にかかり翼は決め技を出す為にジャンプした。

〈蒼ノ一閃〉

翼はアームドギアを大型化させ刀にエネルギーを集め
威力を少し抑えて巨大な青いエネルギー刃を放ち

残りのノイズをすべて両断し、そのまま爆発した。

ノイズを全滅した翼に司令からの通信が来た。

???「ノイズの反応はゼロ、良くやったぞ翼！」

翼「はい。これくらい"防人"なら当然です。」

???「相変わらずだな、それも。まぁ任務は成功したんだ
二課に戻ってくれ」

翼「了解、では戻ります。」

翼は通信を切ると首からペンダントを取りだし
開くとそこには翼と赤髪の少女が写っている写真だった。

翼「奏・・・私、今も頑張ってるよ。奏の分まで、私が戦うからね」

写真を見ている翼の顔はさっきの"防人"の顔ではなく
"一人の女の子"の顔だった。

???「ほぉー、まさかこんな所に人間がいたとはな」

翼「っ!?」

翼が声がした方へ振り向くとそこにいたのは
牛の怪物『ミノタウロス』だった。

翼「(ノイズではない・・・) 何者だ、貴様は!?」

翼は刀を構え、ミノタウロスに質問した。

ミノタウロス「人間が我々に質問するとはな。
良いだろう、我々は『ファントム』！この世界の影だ。」

翼「何!?」

そしてある司令室では

???「ファントムだと!?」

戻って、翼ｓｉｄｅ

翼「(ファントム・・・?)」

ミノタウロス「さぁ、行け！グール共!!」

ミノタウロスは手から何かを取りだし、石の様な物を
辺りにばら蒔くとその石から戦闘員・グールが生み出された。

翼「くっ!?」

翼は自分に迫ってくるグールに向かって
刀を振りグールに攻撃するがグールが
中々倒れないのだ。

翼 「こいつら、さっきから攻撃しているのに何で倒れないの?」
そう、翼の言うとおりグールは攻撃を受けているが全く倒れる気配がない。
それどころか、まるでわざと攻撃を受けているように見えた。

ミノタウロス「ほう、人間にしてはやるな。流石はシンフォギア装

者だ。」

翼「!?何故それを」

ミノタウロス「お前ら人間ごときが、知る必要はない！」

ミノタウロスは火炎弾を翼に放ち、爆風によって
翼は吹き飛ばされる。

翼「ぐはぁっ！」

???「翼！」

ミノタウロス「ははは！やはり人間では我々には敵わないようだな
俺達にとってシンフォギアなんざオモチャみたいなもんなんだよ。
こんなんで特意義になってるなんて人間はつくづくバカだな。」

翼「くっ・・・！」

ミノタウロスの火炎弾の攻撃によって負傷してしまい
身動きが取れないのだ。

ミノタウロス「さぁ・・・これで、死ね！」

ミノタウロスがそう言うと翼の首を掴み首を閉め始める

翼「ガッ・・・ガハッ」

流石の翼もミノタウロスの力に敵わず、なすがままだった。

翼（私は・・・奏がいなくちゃ、何も出来ないんだ

やっぱりダメなのかな・・・私が奏の分まで戦うなんて
こんな世界に『希望』はないのかな？）

翼は薄れていく意識の中で微かに口を動かした。

翼「いやぁ…。誰か…誰か…。　」

翼は最後まで縋った。何でもいい・・・
神でも、悪魔でもいい。何でもいいから…お願い…。

翼「誰か・・・助けて!!」

待ってて！今行くから!!

翼「え？」

ドカアアアアアアン!!

ミノタウロス「何だ？」

突然、壁を突き抜けてきたのはバイクに乗った少年だった。

そして少年はバイクから降りるとベルトの手形に
手をかざした。

「コネクト　プリーズ！」

すると魔方陣から銀色の銃を取り出すとミノタウロスの
右の角と近くにいたグールに向けて銃弾を数発放った。

ミノタウロス「グァアアアアア！」

グール「グゥウウウウウ！」

銃弾を受けたミノタウロスは思わず手を離していまい
翼は助かった。

翼は今まで自分の攻撃を受けてもほとんどダメージを受けなかった

ファントム達が悲鳴を挙げた事に驚いた。

ミノタウロス「銀の銃弾!?貴様！『魔法使い』か！」

魔法・・・使い？あの人は一体？
すると少年は誰に話しているのか分からないが語り始めた。

明久「助けてって聞こえたんだ。だから必ず駆けつける。
それが『魔法使い』・・・そして

『仮面ライダー』だから！」

話を終えた少年は右手の指輪をベルトの手形にかざした。
すると

「ドライバーオン！プリーズ！」

ベルトの手形の装飾品が変身ベルト
「ウィザードライバー」へと戻った。

そして明久はバイザーが付いた赤い宝石を左手に付けた。
その後、明久はベルトのレバーを操作して右を向いていた
部分を左に向けた。

「♪シャバドゥビタッチヘンシン♪シャバドゥビタッチヘンシン
♪シャバドゥビタッチヘンシン♪シャバドゥビタッチヘンシン」

ウィザードライバーから音声が流れると同時に左手に
付けた指輪のバイザーを降ろした。

そして明久は叫ぶ。これからも叫び続ける
"あの言葉"を・・・

明久「変身!!」

明久がそう叫ぶと左手の指輪をウィザードライバーに
かざした。

「フレイム！プリーズ　ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！」

ウィザードライバーから音声が流れると左手を横に上げた。
そして左手の指輪から炎に包まれた魔方陣が現れると
明久の体を潜った。
するとそこにいたのは明久ではなく顔は左手の指輪と同じ
丸く胸は赤い宝石が立ち並び腰からは黒く中は赤いマントが出て

いた。

そうそれは明久があの儀式の時、希望を捨てず得た力。

「仮面ライダーウィザード　フレイムスタイル」である。

仮面ライダー・・・翼はその言葉を聞いたことがあった。

今、都市伝説として話題になっている仮面の戦士。

だけど都市伝説ではなかった。

答えてくれた。私の声に。「助けて」という言葉に。

あれが

翼「仮面…ライダー」

そして彼はこう言い放った。まるでこれから始まる

長い戦いの幕開けを告げるように。

ウィザード「さぁ、ショータイムだ！」

これが「防人」と「仮面ライダー」の運命の出会いだった。

第2話　約束　Ｐａｒｔ1

ウィザード「さあ、ショータイムだ！」

ウィザードになった明久は、左手を顔に近づけ決め台詞を言った。
それにより、戦いの火蓋は切って落とされた。

［ＢＧＭ　Ｌｉｆｅ　ｉｓ　ＳＨＯＷ　ＴＩＭＥ　］

ウィザードは、左手を降ろしゆっくりとファントム達に
歩いて近づいて行った。
その途中でウィザードはドライバーのレバーを操作して
手形の向きを右向きにすると右手に指輪を着け手をかざした。

「イリュージョン！プリーズ！」

するとウィザードの隣に魔法陣が現れそこから同じ姿をした
もう一人のウィザードが現れた。

ミノタウロス「分身だと！…やれ！」

ミノタウロスが命令すると、グール達は一斉に襲い掛かった。

ウィザードＡ「僕が奴らの注意を引くから、君はあの子を」

ウィザードＢ「分かった」

しかし、二人のウィザードは焦ることなくウィザードＢは
ウィザードソードガンを構えてＡに襲い掛かるグールに
目掛けてトリガーを引き援護していく。

そして、Ａはグールの軍団目掛けて走り出す。

ウィザードＡ「はっ、いよっと、はあ、でやぁっ！」

ウィザードＡは、グールが突きつけてきた三本頭槍を
難なく回転でかわし連続で回し蹴りを食らわし
最後は回転しながら飛び蹴りをグールの頭に叩き込み
敵の注意をひきつけた

ウィザードＢ「良し！今のうちに」

その隙にウィザードＢは倒れている翼に駆け寄り
片膝を付け手を差し出す。

ウィザードＢ「大丈夫？立てるかい？」

翼「はい、すみません。ありがｔ、痛！」

翼は顔をしかめて足に手を添えていた。

ウィザードＢ（まさか、さっきの火炎弾で怪我を・・・）

どうやらあの時、爆風で吹き飛ばされた時に
足を痛めてしまったのだ。

ウィザードＢ「・・・ごめんね？」

ウィザードＢは翼をお姫様抱っこした。

翼「／／／え！あ、あの…ちょ、ちょっと!?」

ウィザードB「しっかり掴まって」

翼「／／／は、はい」

翼は頬を赤くしてウィザードBは翼をお姫様抱っこのまま
安全な所まで走って行った。

その途中でウィザードB＝明久は

（この子・・・確かどこかで・・・。）

と心の中で考えていた。が、それ以前に

（それに・・・何でこの子、こんな恰好をしてるの？）

等、本気と書いて"マジ"で考えていた。

残ったウィザードAは、再びウィザードソードガンでグール達を
撃ち、向かって来るグール達の攻撃を受け止めて
近距離の連続射撃で銃弾を撃ちこむと回し蹴りを繰り出し
グールを仲間と一緒に巻き込ませて外へと追い出した。
ウィザードAもグリップを動かし銃口の上にある刃を展開した。

ウィザードソードガンは、その名の通り銃のガンモード、
剣のソードモードの二つを使うことができるのだ。
そして、ウィザードAはウィザードソードガンをソードモードに変更し
我流だが巧みな剣さばきでグール達を斬っていった。
それから、ジャンプし工場から離れグール達を引き寄せ再び切り裂いていった。

その頃ウィザードBは翼を抱きかかえて工場から出て
Aが出ていった所と違う場所に着いて翼を近くの
座れる場所で彼女を降ろした。

ウィザードB「ここにいてね、直ぐに" もう一人の僕が" ここへ来
るから」

翼「は、はい。あ、ありがとう／／／」

するとウィザードBは足から魔法陣が昇っていきそして消えた。

翼「あれが、仮面ライダー」

そして" もう一人のウィザード" はと言うと・・・

ウィザード「ふっ！はっ！でやぁっ！」

グール達を次々と斬り倒していた。

ウィザード（もう一人の僕がちゃんとあの子を助けたみたいだね。
良し！）

するとそこへ・・・

ミノタウロス「オラアッ」

ミノタウロスが、ウィザード目掛けて自身の武器の槍を降り下ろす
が
ウィザードはそれを難なく避け、次々と繰り出される攻撃も
巧みな動きでかわしジャンプしミノタウロスから距離をおいた。
そして、ミノタウロスが後をグールに任せて自分は逃げようとす

る。

奏〈おい！明久!?奴が逃げるぞ！〉

ウィザード「分かってる！」

奏からの指示で追うとするがグール達に足止めされてしまう。

ウィザード「邪魔すんなっての、はあっ！」

ウィザードは、ソードガンでグールの槍を受け止めると回し蹴りを打ち込んだ。

そして、ソードガンをガンモードにすると

グリップの近くの装飾品の親指のようなレバーを操作すると

「♪キャモナ・シューティング・シェイクハンズ♪キャモナ・シューティング・シェイクハンズ」

装飾品の親指のようなレバーを操作しての指のような部分が展開すると

ウィザードは左手の指輪をかざした。

「フレイム！シューティングストライク！ヒー！ヒー！ヒー！　ヒー！ヒー！ヒー！」

すると、ソードガンの銃口に炎を纏った魔方陣が現れ

必殺技の体制に入りそれを周りのグール達目掛けて撃ち込んだ。

ウィザード「はぁっ！」

すると、グール達は爆発炎上し全滅した。

ウィザード「ふぅ。奴は逃がしちゃったか…」

グールを全滅したのは良かったのだが肝心のミノタウロスが逃げられてしまったのだ。

奏〈どうするんだ、明久？〉

ウィザード「う～ん…使い魔たちに頼もう。魔法を使うのは疲れるけど、仕方がないしね」

奏〈そっか。まっ、明久は大丈夫だろ？結構お前、タフだし〉

ウィザード「僕はそこまで頑丈じゃないから」

と言いながらもウィザードはドライバーのレバーを操作して手形の向きを右向きにして右手に青の馬の絵が書かれた指輪を別の指輪に交換して手をかざした。

「ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！」

「ユニコーン！プリーズ！」

装飾品から何か聴こえたかと思うと目の前にプラモデルの様なパーツが現れそれが自分で組合わさり青い馬の形をしたものが出来た。

ウィザードの使い魔「ブルーユニコーン」である。

ウィザード「と、もう一体と。」

更にレバーを2回操作し右向きにまた戻して右手の
ユニコーン・リングから黄色いタコの絵が書かれた指輪に
交換して手をかざした。

「クラーケーン!プリーズ!」

また同じ様なプラモデルのパーツが現れそれが
自分で組合わさり黄色いタコの形をしたものが出来上がった。
ウィザードの使い魔のひとつ「イエロークラーケン」である。

ウィザードは、ユニコーンとクラーケンにさっきの指輪を着ける
すると道案内をしてくれた赤い鳥・・・
同じく使い魔の「レッドガルーダ」と合流した。

ウィザード「近くにいるはずだから、頼むね」

奏〈頼むなーー♪〉

ウィザードと奏がそう言うとガルーダ達は頷きミノタウロス
の捜索に向かった。

ウィザード「さ〜てと」

ウィザードは翼の元へと向かって走って行った。

Ｓｉｄｅ　翼

明久がグールを全滅させた時の爆音は翼のいる場所まで
届いていた。

翼「今の爆発…きっとあの人が・・・」

すると司令からの通信が来た。

???「翼！無事か!?」

翼「私は無事です。『魔法使い』に助けられましたから。」

???「そうか…無事で何よりだ。それで彼は今どこに？」

翼「さっき怪物を倒したところのようです
後で戻って来ると言っていたのでこっちで合流するところです。」

???「良し！分かった。なら緒川達をそっちに送る
出来れば『彼』も二課へ連れて来てくれるか？」

翼「分かりました。任せてください、それでは」

翼が通信を終了すると
今度は向こうから声が聞こえてきた。

ウィザード「おーい！君ー！」

翼は直ぐに纏っている武装を解除し
通っている学校の制服姿へと戻した。

翼Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

ウィザード「おーい！君ー！」

ウィザードは翼と何とか合流した。

ウィザード「もう大丈夫だよ、牛みたいな奴は
逃げられちゃったけど、今は僕の使い魔達が追ってるから
ひとまず今は安心だよ」

翼「そうですか・・・痛っ！」

立ち上がろうとするが、まだ怪我は治っていなかった。
それを見てウィザードは

ウィザード「無理に動かさないで余計に酷くなるから」

彼は翼の怪我した足にそっと触れ怪我の具合を確かめる。

ウィザード（打撲してる・・・だったらこいつを使うか）

するとウィザードは懐から指輪を取り出した。

ウィザード「ちょっと失礼します」

そう言い、翼の右手中指に明るい緑色の指輪をはめる。

翼「これは？」

ウィザード「これは治癒の指輪だよ」

翼は指輪を受け取り中指にはめるとウィザードは
その手を取ってレバーを2回操作してドライバーに
かざした。

「リフレッシュ！プリーズ！」

すると指輪から癒しの光が翼の体全体を包み込んでいく
その時・・・

奏〈久しぶりだな・・・翼〉

翼（っ!?・・・今の声は・・・まさか！）

そして光が消えていくと
体の傷や足の打撲も治っていた。

翼「凄い・・・本当に治ってる」

翼は素直に凄いと感想を呟いた

ウィザード「治療完了っと♪」

治療を終えると変身を解き、明久の姿へと戻ると
翼は驚いた。何故なら自分と歳が同じに見える
少年があの怪物たちと戦っていた事に

明久「それじゃあ…僕はこの辺で・・・」

明久はそこから立ち去ろうとするといきなり
目の前に黒服とグラサンを付けた男たちが並んでいた。

明久「えっ!?」

翼「貴方をこのまま帰す訳にはいきません」

明久「そ、それって、どういう・こ・・と」

何と今度はさっき助けた翼の両隣にも多数の黒服たちがズラーーーっと並んでいた。

翼「私は風鳴　翼。貴方を重要参考人として特異災害対策機動部二課に同行してもらいます」

明久「えっ！風鳴　翼!?」

ガチャっ!!

明久「・・・ガチャっ」

いつの間にか明久の両手は手錠で拘束された。

明久「何で!?」

「すみません、貴方の身柄を拘束させてもらいます♪」

愛想のいいスーツ姿のお兄さんが笑顔でそう言った。

明久「こ、拘束って・・・」

「それじゃ車のほうにお乗り下さい♪」

明久「・・・マジですか？」

「はい、マジです♪」

また笑顔で言った。

明久「ウゾダドンドコドーン!!」

明久の叫び声も空しく、彼はそのまま正体不明の人達に連行されたのであった。

その途中で明久の首のペンダントでは

奏〈あいつ・・・無茶してるな、あの頃のままで〉

奏は悲しそうにそう呟いていた。

第3話へ続く

第3話　特異災害対策機動部二課

私立リディアン音楽院　とある棟

正体不明の人達に連行されてから数分。

車に乗せられ連れてこられたのが・・・。

「それじゃ、ここに入って下さい♪」

明久『は、はい・・・』

緒川さん（名前は車の中で聞いた）に導かれ、エレベーターに入る。

明久『あの・・・』

緒川「何でしょうか？」

明久『僕はこれから一体どこへ連れて行くんですか？』

緒川「もう少しで着きますよ♪」

そう今、明久はリディアンの校内にいた。

暫く付いて行くとエレベーターの中に入った。

緒川「あっ、掴まってないと危ないですよ？」

明久『あっ、はいっ！』

緒川さんにそう言われ、僕はエレベーターの手すりに掴まる。

その時、一緒にいた風鳴さんとばっちり目が合った。

明久『あ、あはははは・・・／／／』

風鳴さんと目が合い、僕は照れ隠しをするように愛想笑いをした。

翼「ここで愛想は無用よ？」

明久『あっ、はぁ・・・』

風鳴さんにそう言われ、俺は愛想のいい表情を消した。

緒川「しっかり掴まってて下さいね♪」

明久『あっ！はいっ！』

そう言って、緒川さんはエレベーターのスイッチを押した。

すると奏が頭の中に話しかけてきた。

奏〈おい、明久〉

明久〈何？奏〉

奏〈・・・ちびんなよ♪〉

明久『・・・えっ？』

【ガコン！グオオオオオオオオオオオオ！】

『うおおおおおおおおおおおおおお!!』

緒川さんがエレベーターのスイッチを押した途端、エレベーターがすごい
勢いで下降を始めた。

しっかり掴まれっていうのはこういうことだったのか・・・。

そうやって僕達を乗せたエレベーターは暗い闇の底へと沈んでいくのだった。

・・・因みにちょっとちびりそうになったけど漏らしてはいません。・・・絶対

特異災害対策機動部二課

緒川「司令、例の少年を連れて参りました」

自動ドアを開いて、緒川さんがそう声をかける。

「うむ、ご苦労。緒川君」

その声に反応して赤いシャツを着た男性が姿を現した。

この人が緒川さんのいう司令官なのだろうか？

「彼が吉井明久君か？」

緒川「ええ、間違いなく彼が吉井明久君です」

「ほぉ・・・」

言いながら、司令と呼ばれた男性が目の前に歩み寄った。

「・・・」

明久『・・・(す、すごい威圧感・・・。・・・鉄人よりも威圧感があるよ)』

僕がそんなことを思ってると、司令は僕の頭の上に勢いよく手を置いた。

「そうかそうか君が吉井明久君か！確かにいい目をしているな！」

言いながら、バンッバンッと頭を叩いてくる。

ち、縮む・・・身長が縮んじゃうぅ・・・。

緒川「司令、そこまでにしてあげて下さい。彼、困ってますよ？」

緒川さんがそう言って、止めに入ってくれる。

「おっと、すまんすまん」

やっとのことでごつごつとした大きな手が頭から離れる。

「ようこそ特異災害対策機動部二課へ！私が責任者の風鳴弦十郎だ！よろしく頼むな！吉井明久君！」

司令が僕に高らかにそう言ってくる。

ていうか、ここでは愛想は無用じゃなかったけ？司令官愛想ＭＡＸ

ですよ？

明久『・・・』

僕は風鳴さんのほうに目をやる。

翼「・・・／／／／！」

しかし、僕と目が合った風鳴さんは顔を赤くさせながらぷいっと目を逸らしてしまった。

もしかして僕って嫌われてるのかな？

明久『あの、二課って・・・？』

弦十郎「ああ、ここは人類共通の脅威とされる認定特異災害ノイズと対抗するために設立
された特務機関なのだ！」

明久『特務機関・・・？そんな人達がどうして俺をここに連れてきたんですか？』

僕は一番聞きたかった疑問を司令に投げかけた。

弦十郎「それは、君の持っている力に我々は興味があるからだ」

明久『僕の力？』

弦十郎「ああ、我々は君の持つ力・・・魔法に興味があってな
教えてはくれないか・・・君の力のことを」

明久『・・・』

周りを見ると皆知りたがっている顔をしていた
明久は頭の中で奏に相談をした。

明久〈奏・・・どうしよう。この状況で〉

奏〈良いんじゃねぇか・・・別に教えてもさ。
あっ！でもあたしのことは言っちゃまずいから、言うなよ？〉

明久〈分かってるよ〉

明久は一度深呼吸をし、落ち着いて最初から話した。

明久『それじゃあ説明します。まず僕はこの世界の人間じゃありません』

翼「この世界の人間じゃない？どう言うこと？」

明久『僕は異世界から来たんだ』

翼「異世界？」

明久『僕は元の世界では日本の文月市の文月学園に通っていたんです。
聞いたことありますか？』

翼「文月市？文月学園？・・・う～ん、聞いた事がないわね、緒川さん」

緒川「今、調べてみますね・・・やっぱりこの日本に

文月市という町はおろか文月学園なんて学校は存在しません」

弦十郎「でっ、その異世界から来た人の世界はどういう所なのかな？」

明久は弦十郎達に自分が元いた世界について話をした。

弦十郎「試験召喚システム、試験召喚獣・・・この世界では存在しない技術だな」

緒川「それにノイズも存在しないなんて、信じられませんね」

明久「まぁ、確かにそうですよね・・・」

こっちの世界で存在している物が違う世界では存在していないのだから

信じられなくて当然だと明久は思った

翼「では、吉井さん・・・」

明久『あの、出来れば名前で呼んでくれるかな？出来れば皆さんも・・・』

翼「分かったわ、じゃあ明久。貴方は何故魔法が使えるの？」

明久『それを話す前に翼さんを襲った怪物…ファントムの事も話します。』

翼「分かったわ、お願い」

明久は翼たちにファントムの事を説明した。

ファントムとは何か、何故人を襲うのか、どうやって生まれるのかと
そしてファントムがこの世界に転移してきた事も含めて説明した
説明していくと話を聞いていた人の殆どがショックを受けた顔になったり
許せないといった顔も出していた。

明久『ファントムに関してはここまでしか今の所分かっていません』

翼「絶望に追い込んだ挙げ句全てを奪って生まれるなんて・・・酷い。」

弦十郎「ファントム…なんて恐ろしい奴らなんだ」

緒川「ちょっと待ってください、翼さんが襲われたという事はファントムは今、翼さんを狙っているんですか？」

明久『それは分かりません…奴らの中にも命令を無視して無差別に襲う奴らもいるので今の所はまだ・・・』

緒川「そうですか・・・」

明久『じゃあ、そろそろ僕が何故魔法を使えるのかを話しますね』

弦十郎「よろしく頼む」

明久『念のために言っときますけど驚かないで下さいね？』

翼「え？」

弦十郎「それはどういう事だ」

明久「実は僕、体の中にファントムを一匹飼ってるからですよ」

「「「え!?」」」

驚愕の事実に3人が大声を出すと、明久は落ち着かせるような口調で言う。

明久「今は僕の体内で大人しくしてるから大丈夫です。
それに僕を殺して出てくる事はありませんから」

緒川「どうして、ファントムが明久さんの体の中に？」

その言葉を聞いて明久は、自分が魔法使いになる原因を作ったあの日の事を思い出した。
空に浮かぶ太陽に月が重なった、日食の日。
地面に走る赤い亀裂。
自分の目の前でたくさんのファントムを生み出し、死んでいった多くの人々。
そんな地獄を思い出して

明久『それは、僕がゲートだったからです』

緒川「え？」

明久『それで、わけの分からない儀式に無理矢理参加させられた』

翼「儀式？」

明久『詳しくは僕もよく分からないんだ。日食の日に起こった事だけは確かなんだけどね』

明久『その儀式で、たくさんの人達が僕の目の前で強制的に絶望させられて、
ファントムを生み出して死んでいったんだ。僕は自分のファントムを抑えこんで
なんとか生き延びる事が出来たけど、生き残ったのは僕1人だけだったんだ」

三人「「「……!!!」」」

告げられた事実に、三人は絶句した。

明久「生き残った僕の前に現れたのは、白いローブを纏った白い魔法使いだった」

翼「白い魔法使い？」

明久「ああ。その人は僕に言ったんだ。お前は魔法使いになる資格を得た。
頼むこの指輪と君の力でファントムからこの世界の人々を守ってくれ。
ファントムを倒せるのは魔法使いだけだ。
それで僕に指輪とベルトをくれて、僕は魔法使いになったんだ」

三人「「「……」」」

あまりに壮絶な過去に、三人は何も言えなかった。

特に翼は自分が体験したファントムへの恐怖感や五年前の奏を

失ったあの悲しみよりも
辛い体験をしたにも関わらず明久は奏と同じように多くの人々を救ってきた
その姿が翼には、とても輝いて見えた

翼〈・・・この人はそんな辛い思いをしたのに人々の為に今まで戦って来たんだ
いつ化け物になってもおかしくない身体で・・・ずっと、ずっと〉

明久「そういうわけで、僕は今もファントムと戦っている。
ファントムを倒せるのは、この世界で僕だけなんだ。
それに僕はもう誰にも絶望をしてほしくないんだ
あんな目に遭うのは、僕だけで充分だから」

こうして明久の説明は終わり翼も十分聞いて満足したのか席を立ち、すると今度は
司令が座り、真剣な表情で僕に頼んできた。

弦十郎「明久君・・・辛いことを聞かせてしまい本当に済まなかった。」

すると弦十郎は頭を下げて謝罪をした。

明久『いえ、良いんですよ事実ですから』

弦十郎「そうか、ありがとう。では本題に入ろうか・・・
我々と共に戦ってはくれないか？特異災害対策機動部には君の力が必要なんだ」

緒川「僕からもお願いします」

翼「・・・」チラッ、チラッ

明久『ん？』

翼「ッ！／／／」

翼はチラチラとこっちを見ようとしているが視線が合うと顔を真っ赤にして
そっぽ向いてしまった。

だが明久は司令にもう一つ聞きたかった疑問を口にした。

明久『あのその前に、翼さんが纏っていた鎧みたいなあれは一体何なんですか？』

「それは私が説明しましょう～♪」

そう言って、高らかに声を上げたのは白衣を着た眼鏡の女性だった。

弦十郎「そ、そうだな。了子君、よろしく頼む」

了子「はいは～い♪」

了子と呼ばれた女性は司令にそう言うと、俺に元に歩み寄って説明を始めた。

了子「まず初めに聖遺物について説明するわね♪
聖遺物は世界各地の伝説に登場する超古代の異端技術によって作られた結晶で、現代の技術
では製造不可能なすご～ぐ希少な代物なの。

そして翼ちゃんが纏っていた鎧は「天羽々斬」という聖遺物と適合した姿なの
適合者は、シンフォギアを使える者、つまりここでいう翼ちゃんのことね。
そして、天羽々斬は翼ちゃんの歌によって活性化し、エネルギーに還元された後に
あのような鎧の形で再構成される第1号聖遺物のことよ♪明久君、お分かり？」

明久『はい！』

了子「あら、理解が早いのね。お姉さん、驚いちゃったわ」

弦十郎「うむ、俺も少し驚いてしまっ・・・」

明久『全く分かりません！』

【ズコ――――――――ッ！】

俺がそう意気込んで言うと、皆は一斉にずっこけてしまった。
ところどころから「だろうな・・・」、「でしょうねぇ・・・」という苦笑の声が聞こえてくる。
翼さんのほうを見ると、額に人差し指を当てて呆れ顔をしている。

明久『えっ？皆さんどうしたんですか？』

了子「ちょっ、ちょっと、難し過ぎましたね？」

弦十郎「はっはっはっ！そう来たか！はっはっはっ！」

立ち上がった了子さんは苦笑、司令は何故か大笑いしている。

僕、何かウケるようなこと言ったかな？

「改めて、協力してくれるな？明久君」

僕は、再び真剣な表情で聞いてくる司令の言葉に対して・・・。

明久『はいっ！こちらこそ宜しくお願いします！』

コクン、と力強く頷いた。

閑話　片翼と魔法使いの邂逅

？（・・・見えない・・・・暗い・・・・・・あれから・・・・どうなったんだ？）

今　こう思っているこの少女の名は『天羽　奏』

家族をノイズによって殺され、その憎しみだけで生きてきたが
あの日助けられた自衛隊員の言葉を聞いて考えを改め
人を守るために戦い続けてきた…だが今その命が尽きようとしていた…

彼女は逃げ遅れた少女を助ける為に自分の命すらも危険に晒す"
あの歌"を唄った…

その曲の名は・・・・・・絶唱

？「奏！」

自らの名を呼ぶ声が聞こえその声を放つ人物を奏は知っていた

？「お願い奏！死なないで！」

奏「・・・・・・どこだ翼・・・・・・・・・真っ暗でお前の顔も見えやしない・・・・・・」

風鳴　翼…彼女よりも前に戦い彼女を誰よりも信頼しともに戦ってきた
彼女の相棒であり片翼だった。

翼「ここだよ。傍にいるよ奏・・・・・・」

奏「悪いな・・・・もう一緒に歌えないみたいだ」

翼「どうして・・・・・・どうしてそんなこと言うの？奏は意地悪だ・・・・」

奏「だったら翼は泣き虫で弱虫だ・・・・・・・」

翼「それでもかまわない！だからー」

「ずっと一緒に歌ってほしい！」

その言葉を聞き奏は微笑む

奏「知ってるか？翼。思いっきり歌うとな、
すっげぇ腹・・・・・・減るみたい・・・・だ・・・・ぞ・・・・」

奏は今自分が感じている事全てを大切な相棒に伝えると静かに息を引き取った

その顔は全てのしがらみから解放され穏やかであった

彼女の肉体は塵となりそして大切な片翼を残し空へと舞っていった・・・・・・・・

翼「奏――――――――――!!!」

Ａｎｏｔｈｅｒバカとテストと召喚獣の世界　サバト発生翌日

明久が絶望を乗り越えこの場所から去ってから翌日

そこに輝きの中から一人の少女が姿を現した

それは先程ある世界で命を落とした天羽奏であった

奏「うう・・・・・・・あれ？あたしは・・・どうして？」

？「まさかサバトで発生した魔力で人間が蘇るとは・・・

しかもここことは違う異世界とは・・・これぞまことの奇跡だな・・・」

奏「誰だ？」

奏は振り返るとそこには明久をウィザードにさせた白い魔法使いが立っていた

白い魔法使い「ここは君がいた世界ではない。そして君は新たなる命を授かり蘇ったんだ。」

奏「・・・悪いけど言ってることがサッパリ分からねぇんだけど？」

白い魔法使い「少し難し過ぎたか、ここで話すのはなんだ。場所を変えよう。」

「テレポート！ナウ！」

白い魔法使いは指輪を使い自身の家と思われる建物の居間に移動した

奏「え!?ここどこだよ!?」

白い魔法使い「ここは私の家だ。取り敢えずまずは、風呂に入ってこい。
そんなボロボロの格好だと話す気を失くす」
奏は自分の纏っているものの状態を見る
奏「／／／!?」
白い魔法使い「やっと気づいたか・・・・・・・・」
奏「じゃあ・・・・・・・・お邪魔します・・・・・・・・」
そして奏が風呂から上がりそして服を着替えて
白い魔法使いは全てをを話した。
この世界のある一人の少年がサバトの儀式によって『魔法使い』になった事…
人々を絶望させ全てを奪い生まれる魔力の塊『ファントム』
そのファントムが奏の元いた世界へ転移した事…
白い魔法使い「これがこの世界で起こった事だ。何か質問は?」
奏「あ・・・いや・・・なんかホントに異世界に来ちまったなって思って・・・・・・・・」
白い魔法使い「仕方がないさ。でも君は蘇ったんだ。この世界に、これからどうするつもりだ?」
奏「今のあたしには家族はいない。でも、あたしはその分懸命に生

きる。それがきっと
死んだ家族が望んでいる事だから…でもあたしは…元の世界に、あいつを…」

奏は元の世界に残してしまった翼の事が気がかりだった。

そんな奏の気持ちを察したのか白い魔法使いはある提案をした。

白い魔法使い「君は元の世界に戻りたいのか？」

奏「勝手かもしれないけど…あたしは元の世界に戻りたいんだ！
頼む！遠くからでも良い、あいつを…翼を見守らせてほしいんだ!!」

奏は白い魔法使いにそう伝えると彼はゆっくりと立ち上がり
懐から携帯を取り出し、電話をした。

白い魔法使い「私だ…今すぐに私の家に来て欲しい…大丈夫だ案内役も送る…
そいつの後を追えば…私の家に辿り着ける…」

そして電話を切ると白い魔法使いは指輪を白い鳥の模様の指輪と交換し、
魔法を発動させた。

「ガルーダ！ナウ！」

すると目の前に白い鳥のプラモデルの様なパーツが現れ
独りでに組み立てていくとその指輪を空いた穴に差し込むと
白い鳥「ホワイトガルーダ」が完成した。

白い魔法使い「彼をここまで案内させてくれ」

そう頼むと白いガルーダは飛んで行った

白い魔法使い「今" 彼" を呼び出した…あと少しでこっちに来るぞ」

奏「彼？」

白い魔法使い「この世界で誕生した" 魔法使いだ" 」

奏「ありがとよ、何から何まで…そう言えばアンタ名前は？あたしは天羽奏だ」

白い魔法使い「私は・・・・・・・・・」

白い魔法使いは魔方陣を潜り本来の三十代後半の男の姿に戻る

「冴島大牙だ。よろしく頼む。」

そして暫くすると" 彼" が到着した。

明久Ｓｉｄｅ

僕は今、あの白い魔法使いの家の前に来ていた

自分の家で旅立つ準備をしていたところ電話で呼び出され

あの人から貰った僕の愛車「マシンウィンガー」で行こうとしたら

家の前に白いガルーダが来て、僕をここまで案内してくれた。

明久「こんにちは…」

明久は家のドアを開くとそこに三十代後半の男とオレンジ色の髪をした少女
がいた。

大牙「よく来てくれたな・・・吉井明久」

明久「…その声…もしかして」

大牙「そうだ…私が白い魔法使いだ…そして彼女は…」

奏「あたしは天羽　奏だ！奏って呼んでくれ！
あんたの事はこの旦那から聞いてるから宜しくな！」

明久「こっちこそ宜しく！僕は吉井明久、指輪の魔法使いで僕も明久って呼んで」

そして明久は奏の話を聞くことになった

明久「え！じゃあ奏は此処とは違う世界から来たの？」

奏「そう、あたしはここことは違う世界の人間、俗に言う転生者だ」

明久「一体…奏の世界では何が起きてるの？」

奏「あたしの世界にはノイズって言う化け物がいるんだ」

明久「ノイズ？ノイズって・・・雑音の事？」

奏「そんな可愛いもんじゃないさ。ノイズには実体が無い、何て言うか、
ノイズは波のような存在なんだ」

明久「それじゃあ攻撃出来ないじゃないか？じゃあどうやってそのノイズを倒してきたの？」

奏「ある遺跡から見つかった過去の技術によって奴等を実体に変えて

戦闘能力を与えるシステムが開発された。それが『シンフォギアシステム』…

あたしもその奏者だった。だけどあたしは薬品を投与して奏者になったんだ…

・・・・・家族の仇を打つために」

明久「まさか・・・そのノイズに家族を・・・」

奏「ノイズは触った物を炭素に変えちまうんだ。それから暫くは復讐の為に戦ってきた。

だけど気づいたんだ。こんなあたしの力でも誰かを守れることができるって。

そしてあたしよりもギアの奏者になった子と一緒に歌いながら戦ってた」

明久「歌⁉なんで戦ってる最中に歌うわけ⁉聞くのは分かるけどさ」

奏「シンフォギアは歌に反応して力を発揮するんだ。

それに歌は勝手に頭の中に入ってくるものなんだ。」

明久「何だかややこしいシステムだね…シンフォギアって…

それじゃあ歌いつづけなきゃ変身も維持出来ないの？」

奏「いや、変身は自分の意思で解けるけど。それよりも頼みたい事

があるんだ」

明久「何？」

奏「今あっちでは今がどうなってるのかは分からない…
それなのにファントムまで現れたら間違いなく翼が危ないんだ」

明久「翼？その子が奏よりも前にいた奏者なの？」

奏「ああ！だから頼む！あたしの世界に行って翼を…ノイズとファントムから守ってくれ！
あたしにはもう戦う力が無い…だけど明久！お前なら戦う事が出来る！
今はお前にしか頼めないんだ！頼む！明久、この通りだ！」

奏は頭を下げながらながら頼み込んだ
そして明久は奏の頭を両手で添えるとそのまま抱きしめた

明久「分かったよ約束する…奏の想いは十分伝わったから…」

奏「え？」

そして奏の両肩に自分の手を置き、目線を合わせると明久は言った

弾「僕はファントムから人々を守る為に戦うって誓ったんだ。
それにノイズも人々を絶望へと陥れるならそいつらとも戦う！
僕は行くよ！奏の世界に…それが指輪の魔法使いだからね！」

奏「ありがとう、明久」

明久「でも行く前に後もう一つだけ約束をしよう」

奏「え？約束？」

明久「奏も僕と一緒に着いていくこと…これだけだよ」

奏「それだけ・・・って、行ってもいいのか？一回死んだあたしが？」

明久「死んだからこそ、今は生きてることをちゃんと伝えた方が良いよ。

その方がその翼っていう子もきっと嬉しいと思うから」

奏「会っても良いんだ…良かった。本当ならあたしが自分で行きたかったんだ。でも・・・・・・・」

明久「そう言うことは言わなくて良いの。それじゃあ明日迎えに行くから…じゃあね♪」

そして明久はバイクに乗り準備を続きの為、家へと帰って行った…

翌日・・・明久は奏を迎えに行く為にそして奏の世界へ旅に出る為に家を出て行った。

マシンウィンガーに乗って向かう途中で明久は文月学園に通う生徒たちの行列を見つけた。

その中にはクラスメイトであり友達の雄二や秀吉、ムッツリーニ、姫路と島田の姿もあった。

皆は僕の存在には気づいていないのかそのまま進んでいった。

外からはヘルメットをしていて見えないが明久の目には涙が溢れていた

明久「僕はもう…あの中にはいられないんだ…」

明久は後ろに振り向き

明久「皆…さようなら…元気でね」

そして明久は人知れずその場を離れた…

マシンウィンガーで白い魔法使いの家に到着した明久は奏を呼ぶ為に家の中に入った。

大牙「よく来てくれたな…奏ならあそこだ…」

明久「はい…」

奏「明久…来たんだな」

明久「うん…良いんだね。奏」

奏「あぁ…」

大牙「明久、奏の世界に着いたらこの指輪を使った方が良い」

そう言うと大牙から明久にあるウィザードリングを手渡した。

明久「これは？何の指輪ですか？」

大牙「その指輪は彼女を入れる為の指輪だ。

今、奏の世界では彼女は死んだ人間となっているそんな人物がうろちょろしてたら流石にマズイ…

だが、今の奏の体は魔力で出来ているんだ。この指輪は

主に奏の姿を隠す為に使ってくれ…彼女の体の事なら心配することはない
この指輪の中でも彼女は見る事も聞く事も話す事も出来る。」

明久「凄い指輪ですね…奏は我慢出来る？この指輪の中に入るの…」

奏「あたしなら平気さ！翼を見守る為ならその位我慢してやるさ！」

明久「分かったよ…でもどうやってやるんですか…これ？」

大牙「まず明久が指輪を嵌めた後、ドライバーにかざしてくれ
その後で奏が自分の手を明久の指輪を嵌めている手に重ねてくれ
そうすれば彼女は指輪の中に入れる」

明久「分かりました…さぁ、行こう。奏」

奏「おう！色々とありがとうな、大牙の旦那…行って来るぜ」

大牙「ああ、気を付けるんだぞ…2人とも」

そして二人はマシンウィンガーに乗り込みエンジンを吹かせると
2人はそのまま走って行った。

残された大牙はもう聞こえないかも知れないのを知っていても尚
言葉を綴った。

大牙「頑張るんだぞ…明久、奏」

そして2人は旅立った…ノイズとファントムから

人々の希望を守る為に・・・

第４話約束　Ｐａｒｔ２

弦十郎「改めて、協力してくれるな？明久君」

僕は、再び真剣な表情で聞いてくる司令の言葉に対して・・・。

明久『はいっ！こちらこそ宜しくお願いします！』

コクン、と力強く頷きそして握手をした。

弦十郎「そうか！よし！よく言ってくれた！感謝するよ、明久君！俺の名は風鳴弦十郎。

この特異災害対策機動部二課の司令官を務めている」

明久『えっ？風鳴って・・・あの人の苗字も確か・・・』

弦十郎「そう！俺は翼の叔父だ！」

明久『ええっ!?そうだったんですか!?』

弦十郎「うむ、そうなのだよ明久君」

マジか!?マジで!?マジだ!?ショータァーイムっ!!

すごいこともあるんだな・・・こんな大規模な特務機関の司令官がまさか

風鳴さんの叔父だったなんて・・・。

この時改めてこの世界の日本の狭さを実感した。

了子「そして私は「出来る女」、「天才考古学者」で有名な櫻井了子で～す♪これから
仲良くしましょうね明久君♪」

言いながら、了子さんが僕の肩に手を回した。

了子「透き通るような綺麗な瞳・・・誰かの物になる前に私の物にしちゃいたいくらい・・・」

了子さんが俺の顎を人差し指でクイッと持ち上げながら妖艶な声でそう言った。

明久『りょっ、了子さん!?、それって一体どういう意味ですか／／／？』

了子「そんなに知りたい？だったら後でそのことについて個人レッスンしてあげるけど？」

明久『けっ、結構です／／／／！』

そう言って、了子さんからバッと離れた。

それでも了子さんは変わらずにこにこしている。

了子「や～ね明久君、冗談よ。半分はね♪」

明久『じゃ、もう半分は!?』

了子「それは内緒♪もう、初心なのね♪」

唇に人差し指を添えて悪戯っぽく笑う。

こ、この人って、一体・・・何？

緒川「司令、そろそろ。もう遅い時間ですし」

弦十郎「そうだな、明久君、今日はもう帰ってくれて結構だよ」

明久『あ、そうですか。それじゃあ・・・』

ズシッ・・・

明久『あっ、手錠付けられたままだった・・・』

どおりでさっきから手が重いと思ったよ・・・。

翼「はあ・・・緒川さん、お願いします」

緒川「はい、翼さん♪」

風鳴さんに呼ばれ、緒川さんが僕の両手に付いていた手錠を外してくれた。

明久『あっ、ありがとうございます』

緒川「いえいえ♪」

手錠を外してもらい、改めて荷物を受け取る。

明久『本当にありがとうございました。それじゃあ・・・』

すると指令室にアラームが鳴り響いた。

一同『!?』

弦十郎「どうした!?」

「○○噴水公園周辺にノイズが大量発生しました！」

弦十郎「分かった、翼、出動してくれ！」

翼「分かりました！」

明久『僕も行った方が・・・』

緒川「明久君は先程ファントムと戦ったばかりなので今はお休みしてください。大丈夫です。」

翼「ここからは、私の・・・防人の役目です。」

そう言うと翼はエレベーターの前に立ち来るのを待つ
そして着いたエレベーターに乗り込もうとしたら後ろから
明久が翼を呼び止めた。

明久『翼さん、もし本当に絶望しそうになったら―――』

こっちを見ている翼の瞳を見つめ返す明久は指輪を付けた右腕を
まっすぐ突出し、

明久『僕が君の・・・最後の希望になってやるよ』

自身と決意に満ちた笑みを浮かべて、力強く言い切った。

翼「……、――――――ッッ!!」

しばしの静寂の後、突然翼の顔がボンッと赤くなった。

翼「なッ!?あ、あああ、貴方は何を言っているの！からかうのもいい加減にして！

私は防人で人々を守る剣なのよ！貴方みたいな人に私の希望になる必要なんてないわ!!」

明久の言葉をどう受け取ったのか、さらに顔の赤みを増していく翼。

翼「もう行きます！」

羞恥心を振り切るように翼は今度こそエレベーターの中に入り地上へと昇って行った。

明久『…もしかして怒らせっちゃったかな?』

弦十郎「翼の事なら心配するな、あいつなら大丈夫だ」

明久『はぁ・・・』

明久（何だろう…何だか嫌な予感がする）

奏〈翼・・・〉

その頃、翼はバイクに乗りながら現場に向かっていた。

翼（何なの!?さっきのあれ！私をからかってるの!?なんて軽い男なのかしらあの人!!）

翼は二課で明久に言われたあの言葉を聞いてから心臓が激しくドキドキと鼓動していた

翼（でも・・・あの時）

『僕が君の最後の希望になってやるよ』

翼（・・・あの時の彼の目・・・とても真っ直ぐな目だった…
本当に私の最後の希望になってくれる…そんな真っ直ぐな目をしていた。）

翼は自分の胸に手を当てると今でもドクンッ、ドクンッと心臓が少し早く鼓動している。

（何なのこれ・・・どうして私、こんなにもドキドキしてるの？・・・何…この気持ちは？）

等と考えていたが直ぐに翼は気持ちを切り替える

（吉井明久・・・貴方にも戦う覚悟がある様に私にも防人としての覚悟がある
だから貴方に見せてあげる、私の覚悟を！）

翼『Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ・・・・・・』

翼は起動聖唱を歌い、胸の天羽々斬が反応し翼の周りにエネルギーフィールドが展開する、
インナースーツ、脚部装甲、腰、腕、ヘッドフォンが装着されアームドギアが現れ

胸の天羽々斬の形が変わり翼は自身のシンフォギア『天羽々斬』を装着した

ＢＧＭ『絶刀・天羽々斬』

明久『あれが翼さんの？』

弦十郎「そうだ、あれがが翼のシンフォギア『天羽々斬』だ。」

翼は装着と同時に現場に到着する

そして翼はノイズどもに立ち向かう

翼「♪」

翼は走り抜けながらノイズどもを斬っていきアームドギアを巨大化させる

〈蒼ノ一閃！〉

横一文字に巨大なエネルギー斬撃波を放つ蒼ノ一閃を放ちノイズども纏めてを両断する

「♪」

続けて空高くジャンプし、上空から無数の刃を展開しそれを空から降って来る雨の様に放つ技

「千ノ落涙」を放ち、多数のノイズを消滅させた。

剣を元に戻し、そのまま走りながらノイズ達を切って、切って、切り伏せて行った

そんな彼女の様子を陰から異形の者が見ていた。

「ふふふ、今度こそ…お前を絶望に堕してやる」

そんな異形の者を空からレッドガルーダが見ていた。そしてガルーダはその場から飛んで行った。

そして二課では映像に映し出されている翼の奮戦ぶりに明久は驚いていた。

明久『凄いな、翼さん』

緒川「当然ですよ、翼さんはシンフォギアの正適合者でもあり、防人でもあるんですから」

明久『防人か・・・』

奏〈あいつ・・・〉

するとエレベーターからさっきのガルーダがやって来た。

明久『ガルーダ!?もしかして見つけたの?』

弦十郎「ん?明久君それは何だい?」

明久『僕の使い魔のガルーダです・・・で、どうだった』

ガルーダは明久に翼があの時逃がしたファントムにまだ狙われていることを伝えた。

明久『やっぱりまだ翼さんを狙ってたんだな・・・』

緒川「もしかしてファントムが翼さんを!?」

明久『そうらしいです、やっぱり僕も行きます！』

弦十郎「明久君!!」

明久は弦十郎から呼び止められる。

弦十郎「翼の事を、司令として、いや一人の叔父として頼む…翼を守ってくれ…」

緒川「僕からもお願いします…翼さんを守ってください・・・」

２人は明久に頭を下げ明久にお願いをした。

それを受けて明久は

明久『任せて下さい、翼さんは僕が守ります。絶対に』

そして明久はエレベーターに乗り込んでいった。

その頃、翼は・・・

翼「♪・・・はぁ」

唄い終えると同時に翼はノイズを全滅させた。

そして辺りを見渡し他にノイズがいないか確かめると

首に掛けているペンダントを片手の掌の上に乗せて目を落とす。

翼「奏・・・」

だが・・・

翼「ぐぁあ!!」

翼の足元でいきなり爆発が起こり彼女は吹き飛ばされた。

そしてゆっくりと翼の元に異形な影が近づく・・・

ミノタウロス「あはははは!!また会ったな、ゲート!!」

そこにはあの時逃げたミノタウロスだった。

翼「貴様はあの時のファントム・・・」

ミノタウロス「さて、適度に痛めつけてから絶望させてやる」

翼「誰が貴様に絶望させられてたまるか!!」

そして翼とミノタウロスは戦闘を開始した。

翼「はぁ!!やぁ!!」

翼は刀を振るがミノタウロスは自分の武器である槍でそれを上手く防御し

カウンターで攻める。

翼「ならばこれで!!」

〈蒼ノ一閃!〉

距離を取り翼は〈蒼ノ一閃〉を放つ。だがミノタウロスはそれを躱し、
翼に向けて口から火炎弾を連射する。
翼は空中でアームドギアの影に隠れて防御するが足場が無い空中では踏ん張る場所が無い為
そのまま耐え切れずに吹き飛ばされ地面に落下する。
その時流れ弾で翼のペンダントの紐をかすり、地面に叩き付けられた拍子で外れてしまった
そのまま写真が入ったペンダントをミノタウロスが拾い上げる。
ミノタウロス「ほぅ、これが貴様の心の支えか・・・」
翼「そ、それを・・・返せ・・・それ、は・・・」
翼はアームドギアを杖にしながらも立ち上がる
ミノタウロス「貴様のその力は元々は与えられた力だ・・・その力に選ばれた事で自分が
特別な存在にでもなったつもりか?貴様はその力を借りているだけに過ぎない、
力が無い貴様は・・・ただの価値のない無力な存在だ。」
そしてペンダントを翼の目の前で落としそれをミノタウロスが踏みつぶした。
翼「ぁ・・・」

ミノタウロスが足を退けるとそこには壊れたペンダントとそしてぐしゃぐしゃになった写真だった。それを見て翼の心の中の奏と自分が笑い合っている思い出に紫色のヒビが入った。

急に体の力が抜け落ち、手に持っていたアームドギアも手を離してしまった。

すると翼はまるで自分の身体の異変に気づくと突然胸を押さえつけ

苦しみだした。

翼「ハァっ、ハァっ、ハァっ・・・」

そんな翼の異変をモニターで見てる二課の皆は・・・

弦十郎「どうしたんだ!?翼ぁ!!」

緒川「翼さん!!しっかりしてください!!」

了子「翼ちゃん!!」

二課の皆も翼に何が起きてるのか全く分からないのだ

緒川「一体、翼さんに何が?」

弦十郎「俺達にはどうする事も出来ないのか・・・クソッ!!」

了子「弦十郎君・・・」

弦十郎は自分の無力差に血が滲み出るくらいに拳を握りしめる

そんな弦十郎の姿を見て了子は心配そうに見つめていた。

翼（ここまで・・・なの？やっぱり私には・・・防人なんて・・・務まる訳が・・・ないんだ）

薄れていく意識の中、翼は諦めようとしていた。

（こいつの言う通り・・・私の力は与えられた物なんだ・・・力が無ければ私は・・・

存在する価値なんて・・・生きる意味なんて・・・）

無防備な翼にミノタウロスは翼の首を掴み上げては首を絞める力を強める

ミノタウロス「さぁ！貴様も絶望して新たなファントムを生み出せ!!ハハハハ!!」

翼（奏・・・ごめんね・・・）

死を覚悟した翼に声が聞こえた。

『諦めるな！』

その時、ミノタウロスに向かって一つの銀弾「Ｓｉｌｖｅｒ　Ｂｕｌｌｅｔ」がミノタウロスに命中する

ミノタウロス「グハッ！何ｄ・・ウオァ!!」

ミノタウロスが銃弾を受け更に何かに吹き飛ばされミノタウロスが遠くに吹っ飛び

降り飛ばされた翼をお姫様だっこで受け止める

翼「誰？・・・・・・・・・・・・貴方は・・・・・・・」

翼を救ったのはマシンウィンガーで翼の元に急いでいた明久だった。

明久はマシンウィンガーでミノタウロスを引き飛ばしたのだ

明久『言ったでしょう、僕が君の最後の希望になるって・・・』

翼「吉井・・・明久？」「どうして貴方がここに？」

明久『僕の使い魔が知らせてくれたから駆けつけ来たんだ・・・間に合って良かったよ』

翼「どうして・・・どうして貴方は戦ってるの？貴方は防人ではない筈なのに・・・どうして？」

明久『・・・僕と同じ人を二度と増やさない為にかな・・・』

翼「え？」

明久『僕が味わった苦しみや悲しみをもう他の誰にも味わって欲しくないんだ・・・

僕は望んで魔法使いになったんじゃない・・・生きるって希望を持ったから魔法と言う「力」を

手に入れる事が出来たんだ・・・でも僕が力を手に入れる事が出来たと同時に一緒にいた人たちを

守ることが僕には出来なかった・・・だから僕は戦うんだ。同じ悲しみを二度と繰り返さない為に

僕と同じ魔法使いを二度と作らせない為に・・・』

翼「・・・」

翼は目の前でそう言った彼の言葉に改めて彼は自分よりも辛くて悲しい過去を背負い
そして同じ様に悲しむ人を増やしたくないと覚悟を持って戦っている。
そんな明久に対して翼は自分よりもちゃんとした戦士だと思った。

ミノタウロス「指輪の魔法使い！お前なんかに関わってる暇はない」

明久『それはこっちの台詞さ・・・でもお前に言っておく事がある』

ミノタウロス「何だ」

明久「確かに翼さんの力は与えられた力だ。でもお前なんかに翼さんの何がわかる。
この子は・・・何かを成し遂げ・・・何かを守る為・・・防人として貫く為に
そして・・・この世界の希望の為に戦って来た立派な女の子なんだ！
それが風鳴　翼だ!!お前に彼女の価値観を決める資格はないんだよ!!

そんな力強い言葉に翼は明久を見つめる。

ミノタウロス「何だお前は!?一体何なんだ!?」

明久「唯のお節介な魔法使いさ！覚えておけ！」

『ドライバーオン・プリーズ！』

『シャバドゥビタッチヘンシーン！　シャバドゥビタッチヘンシーン！』

翼さんは、必ず護ってみせる。奏と「約束」したから・・・

明久〈行くよ奏!!〉

奏〈ああ!!〉

「変身！」

『フレイム・プリーズ！』

『ヒー・ヒー！　ヒーヒーヒー!!』

ウィザード「さぁ、ショータイムだ」

ミノタウロス「くっ・・・・調子に乗るなーーーーー。」

ウィザードの挑発に乗ったのか、ミノタウロスは鬼神の如く攻撃を繰り出したが

ウィザードはそれを避けガンモードを撃ち込みミノタウロスを吹き飛ばし

再びソードガンをソードモードにしミノタウロスの攻撃を回転しながら飛びかわすと

右横、斜め下とソードガンで切り裂き左脚で蹴りを打ち込みミノタウロスを吹き飛ばした。

すると、ミノタウロスは槍をウィザードに突き刺そうとするがウィザードはソードガンを前に突き出し

槍を破壊した。そして、ソードガンはミノタウロスの胴体に当たり再びミノタウロスは吹き飛ばされた。

ミノタウロス「くっこんのおおおおおおおおおおおおおおおお！」

ミノタウロスは、自身の怪力を生かした突進を仕掛けてきた。
ウィザードは、ソードガンで突進を防いだがあまりの怪力に押されていく。

ウィザード「ちょちょちょ、おいおいおい、うおっと、まったく困った暴れん坊ちゃんだな。」

ウィザードは、ミノタウロスに振り落とされたが何とか着地しベルトの鎖に着けていた
黄色で四角の形でバイザーが付いた宝石の指輪を取り左手に着けベルトのレバーを操作し指輪をかざした。

「ランド　プリーズ　ド、ド、ド、ド・ドン！ドンド・ド・ドン！」

すると、ウィザードの足の所から黄色の魔方陣が現れまるで
大地の恵みを受けるようにウィザードの体を潜り抜けその姿を変えた。
顔は、指輪のように黄色い四角になり胸の宝石も黄色に染まりマントの内の色も黄色になった。
大地の力とパワーに優れた姿

「仮面ライダーウィザード　ランドスタイル」である。

ミノタウロス「貴様、エレメント変化できるのか。」

ミノタウロスは、そういうと再び突進を仕掛けてきた。しかし、ウィザードは

ウィザード「まあね、」

そう言って、別の指輪を右手に着けベルトのレバーを操作し指輪をかざした。

「ディフェンド　プリーズ」

すると、目の前に土の壁が現れミノタウロスはそれに挟まった。
これが、ディフェンドリングの力である。各スタイルのエレメントによって
魔法でそれぞれの壁を作り出すことが出来るのである。
ランドスタイルの場合は土の壁を発動することが出来るのである。

ミノタウロス「くっぐう」

ウィザード「フフーン。おりゃっ！」

ミノタウロス「ぐはあ」

ウィザードは、壁に挟まったミノタウロスを鼻で笑うと回し蹴りを喰らし空中に吹き飛ばした。
フレイムスタイルに比べパワーはこっちの方が上のためこのような事が出来るのである。

ウィザード「こんなのもあるんだよ」

ウィザードは再びベルトのレバーを操作し変身の時の位置に手形を動かした。

「シャバドゥビタッチヘンシン♪シャバドゥビタッチヘンシン♪」

変身待機音が鳴りウィザードは今度は緑でバイザーの付いた三角の宝石の指輪を取り
左手に着けベルトにかざした。
「ハリケーン　プリーズ　フー、フー！フーフーフーフー！」
今度は、緑の魔方陣がウィザードの上に現れウィザードはそれを自ら潜り抜けた。
そして、頭は緑の逆三角になり胸の宝石は緑に染まりコートの中は緑になった。
風の力とスピードが上がった姿
「仮面ライダーウィザード　ハリケーンスタイル」である。
ハリケーンスタイルになったウィザードは魔方陣を蹴り吹き飛ばしたミノタウロスの方向へ飛んだ。
ハリケーンスタイルは、風の力を使うことができるので空を飛ぶことが出来るのだ。
そして、その力を生かしミノタウロスを右、左、後ろ、斜めと多方向から攻撃しミノタウロスに
ダメージを与え地面に叩きつけた。
そして、ウィザードはフレイムスタイルの指輪を着けベルトのレバーを操作し指輪をかざした。
「フレイム　プリーズ　ヒー、ヒー、ヒーヒーヒー！」
そして、フレイムスタイルに戻ると別の指輪を右手に着けてベルトを操作し指輪をかざした。
ウィザード「さあ、フィナーレだ！」

「ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！
ルパッチ・マジック・タッチ・ゴー！チョーイイネ！キックストライク！サイコー！」
「ハアアアアアアア!!」

ベルトから音声が流れるとウィザードの足元に炎を纏った魔方陣が現れウィザードは
回転し右足を前に出す構えをした。すると、炎が右足に集まりそして覆われた。
それから、ロンダート（側方倒立回転跳び１／４ひねり）をし威力を倍増させ空中反転し
飛び蹴りの体制に入った。各スタイルによって異なるが魔力を倍増させ相手に叩き込む
ウィザードの必殺キック「ストライクウィザード」である。

ウィザード「ハアア!!」

ストライクウィザードが決まりミノタウロスは魔方陣に包まれ爆発炎上した。

ミノタウロス「うわあああああああああああああああああああ！」

ドカーン！

ウィザード「ふぃー」

ウィザードは、安息の声を出した。

しかし、

奏〈明久！〉

ウィザード「!?」「あっ・・・・・翼！」

そう、翼の体にヒビが入りファントムが生まれそうになっていたのだ。

奏〈明久！このままじゃ翼が!!〉

ウィザード〈もう僕の目の前で二度とそんな事させはしない。〉

ウィザードは、そう言いながら翼に近づき翼を抱えて近くの木陰に降ろした。

ウィザード『・・・翼・・・』

翼「魔法使い？・・・もう、私・・・」

ウィザード『絶望なんかしちゃダメだ、僕に任せて』

ウィザードは、翼にそう言うと自分の顔が書かれたオレンジ色の指輪を取りだし

翼を励ましながら指輪を着けさせた。

『僕が君の・・・最後の希望になってやるよ』

翼は二課での明久が言っていた言葉を思い出した。

翼「それが、魔法使い、貴方の覚悟ね」

ウィザード『「約束」する僕が最後の希望だ』

そして、指輪を着けさせた千冬の右手をベルトにかざした。

「エンゲージ　プリーズ」

すると、翼は倒れ翼の上に魔方陣が現れる。

ウィザードは奏が入っている指輪を着けベルトにかざした。

すると指輪は奏の姿へと変わる

ウィザード『じゃあ、奏、彼女を見てて。僕はちょっと行ってくるから』

奏「明久・・・頼むな」

ウィザード『分かってる、翼は必ず助けるから』

そしてウィザードは魔方陣の中に入って行った。

そして、翼の精神世界「アンダーワールド」に向かった。これが、エンゲージリングの力であり

着けた人物のアンダーワールドに行きファントムを倒しに行くのだ。

ウィザードは、なんとか翼のアンダーワールドに辿り着いた。

ウィザード『ここが、翼の精神世界、アンダーワールドか』

そして、ウィザードの目に写ったのは翼と奏が笑い合っている場面だった。

【シンフォギアの第４話のあの回想シーン　参照】

すると、空間にヒビが入り巨大ファントム「ワイバーン」が現れた。
そして、ワイバーンが空間に衝突するとヒビが広がり今にも現実世界に跳びだしそうであった。
同じく、現実世界でも翼の体のヒビは広がっていく。

奏「明久、急いでくれ」

アンダーワールド

ウィザード「『約束』したからね、2人と、だからやるしかないんだ」

ウィザードは、そう言うと竜が書かれた指輪を着けベルトにかざした。

「ドラゴライズ　プリーズ」

ドラゴライズリングによって明久の体内にいるファントム「ウィザードラゴン」が現れた。
しかし、ドラゴンもファントムのためはやく制御しないとファントムの誕生に助走をかけてしまうのである。ウィザードは、コネクトリングを着けベルトにかざし魔方陣からマシンウィンガーを出し
ドラゴン目掛けて走った。

ウィザード『ドラゴン！僕に従え!!』

「コネクト　プリーズ」

ウィザード『ハアっ！』

そして、ウィザードはドラゴンに近づくとマシンウィンガーは翼の

ような姿に変わり
ドラゴンの背中に合体した。
これがドラゴンを制御できる形態「ウィンガーウィザードドラゴン」である。
ウィザードは、ドラゴンを制御しワイバーン目掛けて突っ込んで行った。
すると、ワイバーンは、ドラゴン目掛けて光弾を放ったがそれは当たらず
ドラゴンも口から炎を放ちそれに応戦した。
そして、ドラゴンとワイバーンは空中で衝突しあい互いに地表に落下し取っ組み合いをしながら
飛び一旦距離を取るとウィザードはウィザードソードガンをソードモードの状態で取りだし
手型の装飾品のレバーを操作しフレイムリングをかざした。

「キャモナ・スラッシュ・シェイクハンズ♪キャモナ・スラッシュ・シェイクハンズ♪
フレイム！　スラッシュストライク！　ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！ヒー！」

すると、ソードモードの刃先が炎を纏う。そして、ワイバーン目掛けて接近し横に切り裂くように一閃した。

ウィザード『ハア！』

ウィザードの一閃を食らったワイバーンは、魔方陣に包まれ爆発炎上した。

ウィザード『ふぅ・・・』

すると、現実世界の翼の体のヒビは消え元に戻った。

そして、魔方陣が現れウィザードが戻ってきた。
これによって、翼はゲートでは無くなったのである。

ウィザードは明久の姿に戻る

奏〈明久・・・翼は・・・・〉

明久『もう大丈夫、これでこの子はゲートじゃなくなった。もう襲われる事はない。

約束は果たしたよ、奏』

奏「ああ、ありがとう、明久」

それから・・・

目を覚ました翼が見たのは二課の治療室の天井だった。
部屋は夕日の色に染まっており窓の向こうには太陽が沈み掛けていた。

あの後・・・明久から連絡を受けた司令は緒川さんを翼の保護に向かわせ
現場に着くとそこには制服姿の翼が公園のベンチで気持ちよく眠っている姿だった。

そのことを緒川さんに聞かされた翼は司令に今日一日はゆっくりしろと言われたので
この治療室のベッドに腰掛けていた。

そして自分の左手の中指にはエンゲージリングが着けられていた。

その指輪をそっと撫でると翼はそぉっと自分の胸に手を当てると
あの時の絶望の気持ちとは違うあったかくて優しい気持ちが心の奥底から
湧き上がって来たのだ

（・・・この感じ、暖かい・・・あの時のとは違う、そっか、私は・・・）

（彼に・・・恋をしたんだ／／／　恋なんて私には必要のない物だって今まで考えて来た
私が防人である為にはそんな物、邪魔だって・・・でも今は違う。
私は・・・防人である前に・・・一人の女の子だったんだ・・・）

そして彼女は夕日を見つめて小声で呟いた。

翼「・・・希望・・・か」